

2023 年 12 月 8 日

国際基督教大学外部評価報告書

上智大学総合人間科学部教育学科

杉村 美紀

2023 年 11 月 10 日に貴国際基督教大学を訪問させていただき行いました外部評価について、以下の通りご報告申し上げます。

国際基督教大学（以下、ICU）は、1953 年の開学以来、平和を希求し、人類社会の平和的發展に寄与する人材の育成を目指して、学問への使命、キリスト教への使命、さらに国際性への使命の 3 つの使命を柱にリベラルアーツ教育を実践してきた。またそのために徹底した小規模教育を維持している。そこでは、相互理解の促進と自己の気づきのために何より対話を重視し、批判的思考力を養うことを目的とし、語学教育プログラムを通した学術基礎教育、日本語・英語によるバイリンガル教育、日常のキャンパスでの営みを含むすべてを通じた全人教育が展開されている。

こうした ICU の高等教育機関としての特徴ある教育活動は、大衆化や民営化に加え、国際化が進むなかで、質保証の重要性が議論されている今日の高等教育のあり方にも大きな示唆を含んでいる。そこには、ユネスコをはじめとする国際機関等でも「教育の変革（transforming education）」が模索されているなかで、大学が果たすべき役割とその課題を考察するためのさまざまな論点を呈していると考えられる。そこで本評価報告書では、ICU のもつリベラルアーツ・カレッジとしての先導的役割と課題について、外部評価にあたり大学側でご準備いただいた資料および 2023 年 11 月 10 日に行った関係者への聞き取り調査を基に管見を報告する。

1. 教育

1-1. 柔軟で多様な学びを可能にする専修分野の選択制度

ICU では、学生はすべて 1 つの学部である教養学部アーツ・サイエンス学科に所属し、31 のメジャー（専修分野）を選択しながら学ぶ体制を整えている。この 31 のメジャーの選び方には 3 つのパターン（メジャー、ダブルメジャー、メジャー・マイナー）があり、学生は 2 年次の終わりまでに選択を決定する。ICU では「学年の進級」という考え方はせず、カリキュラムの節目で必要な要件を課している。2 年次の終わりまでに行われるメジャー選択に当たっては「メジャー選択要件」を設け、「既修科目条件」で指定される科目に対して「成績条件」を課している。こうした教育活動は分野融合的な知識の修得と深化、他者との対話を重んじるコミュニケーション力、創造的な課題発見解決力の涵養、対話型の少人数教

育を重視することによって可能となっているものであり、柔軟で多様な学びが保証されている。

またそうしたプログラムについて、より具体的にその学びが将来の進路を含めてどのような広がりを持つかが学生に向けて発信され、可視化されている点も重要である。たとえば学修・教育センター（CTL）には、この 31 の領域をそれぞれわかりやすくまとめた案内が準備されており、そこを訪れた学生は、後述するように学生に対する手厚い学修支援体制のもとで、自分の学びをデザインすることができるようになっている。こうした細やかな心遣いが学生の学びを支えている。

この点に関連して、学生への聞き取り調査からは、それぞれが自分の学びたいメジャーをよく考え検討したうえで決めている様子が見えてきた。多様な専門が準備されている一方で、理系専修は人数が少なく、文系との間のバランスという意味では、学生たちの間でも文系が中心であるという印象があるようであったが、学際的な学びの機会が多いことについては高い評価を得ている。

1-2. 学びの質保証—単位の実質化と学修成果

カリキュラムの運営では、学びをデザインするとともに、その学びがどのような質をもって展開されているかが重要である。この点において、ICU では、学部・研究科において授業内外の学生の学習を活性化し効果的に教育を行うための履修単位制限を設け、単位の実質化を図っている点は、多様な学びを支える質保証として重要である。学部では、標準的な受講単位数は 1 学期について 13 単位（体育実技を履修する場合は 13+1/3 単位）という制限を設け、それより多く履修する際には、アドバイザーの許可を得て履修単位数の上限である 18+1/3 単位まで認められる。こうした CAP 制を採用している大学は他にもあるものの、実質的に機能させることはなかなか難しい。これに対して、ICU の制度は、学生が平均して学期に 4~5 科目を履修することになるという点で、予習にしっかりと時間を割き、個々の科目をじっくりと学ぶことを可能にしている。さらに卒業に向けては、3 年次終了の時点で、4 年次に履修が必要な卒業要件単位数に制限を設け（4 年次に履修の必要な卒業要件科目単位数が 40 単位以下であること）、要件を満たす者にのみ「卒業研究開始資格」を認めている。このことは、最終学年の 3 学期にわたってしっかりと「卒業研究」に取り組み、全学生が卒業論文（9 単位）を提出して卒業にいたるうえでも有効な制度といえる。

また icuMAP と呼ばれる学内システムで、履修状況や成績をはじめ、アカデミック・プランニングに関するエッセイや卒業要件の達成状況など個々の学生が自分の学びの軌跡を確認できるようになっていることも、自由度が高く選択肢の多い履修計画を進めるうえで重要である。

さらに学生を対象に学修・教育センターが行う授業に関するアンケート調査（後述）や、各学期修了時に行われる授業効果調査（TES）を通じて、コースの目的の提示の仕方や、成績の評価基準が明示されているか等の項目を設けシラバスと実際の授業の整合性を確認す

るなど、授業の質を高める工夫が行われている。

1-3. 学生に対する手厚い学修支援

ICU の多様で柔軟な学びを支える特徴は、学生に対する手厚い学修支援である。各学生にはアカデミック・アドバイザー教員が決まっており、毎学期の履修登録の際、アドバイザー教員と学生の個人面談を必須としている。また各メジャーに「メジャー・アドバイザー」が置かれ、各メジャーの学びにかかわる相談窓口として学生の相談に応じる。加えて学生による ICU Brothers and Sisters (IBS) によって、入学時期・メジャー・留学経験・寮生活・課外活動への参加など、様々なバックグラウンドを持つ学部2～4年生による支援体制も組まれている。こうした学生一人一人への適切なアドヴァイジングが、アカデミック・プランニング・サポートのもとに展開されている。このような学修支援体制は、学生たちの立場から見た場合、相談できる窓口が複数あることとなり、多角的な視点からのアドヴァイスを得ることが出来る点で、非常に手厚いものといえる。また IBS は、それを担当している上級学年の学生自身にとっても新たな学びの機会になっている。今回の学生インタビューのなかで、IBS 活動に参加している学生のインタビューからも、そこでの活動実践が自分自身の学びや学生生活を振り返るきっかけとなっていることが窺えた。

加えて、アカデミックライティング能力を支援するためのライティングサポートデスク (WSD) や数学や統計分析などの数理的知識をサポートするデスクなど、学生のアカデミックな各種スキルを伸ばすための教室外の支援が用意されている点も大変興味深い。

同様の措置は、大学院でも、博士前期課程・博士後期課程の学生に対してとられており、入学時オリエンテーションとして、教員及び職員から、修了要件、科目履修の方法、研究の進め方を説明するほか、学部同様、教員アドバイザー制度を設けており、専任教員がアドバイザーとして学生一人ひとりを担当する。履修計画への助言などをし、修士・博士論文の作成にあたっては専門的な指導を中心に学位取得までの指導に当たる体制が整っている。またあわせてデジタルポートフォリオである icuMAP は大学院でも活用されている。

1-4. 機能性と機動力に富んだ学修・教育センター (CTL)

こうした学修支援体制を担う組織として、2015 年度に学内組織を改組して設置された学修・教育センター (CTL) が位置づけられている点も注目される。特別学修支援室、ICT 活用支援、アカデミック・プランニング・サポート、ライティングサポートデスク (最近ではこれに上述したように数理統計のサポートデスクも新設) を統合し、場所も 2018 年からはオスマー図書館 1 階に移転することで、IT センター、図書館とも連携する体制をとるようになっている。このことは、学生向け学修支援と教員向け教育支援 (FD)、そして両者の橋渡しを理念に掲げた活動を展開するのに有効な体制となっている。CTL のミッションステートメントにもあるようにディプロマポリシーの実現のために、学生支援と教員支援を連携させて、「大学全体でシームレスかつインクルーシブな学修・教育環境を構築することを

目指している」ことが良くうかがわれる。

CTL の学修支援は、アカデミック・プランニングを重視し、教員・職員・学生ピアアドバイザーとしての IBS からなる体制で「自発的学修者」の育成を目標としている。多様な選択肢の学びをデザインするプランニングやライティングサポートは前述のとおりであるが、それに加えて、合理的配慮の提供をふまえた特別学修支援やユニバーサルな学修環境の整備と啓発活動も含まれる点は、今日の大学に求められるインクルーシブなキャンパスを実現する上でも有効である。

一方で、教員の効果的な授業実施のため、FD 活動についても、学務副学長の下で全学的な組織体制が生まれ、教員や TA に向けて効果的な学修のための教員向けの啓蒙活動を行っている点も注目される。新任教員の FD プログラムや FD ニュースレターの刊行、シラバス作成支援、さらにコロナ禍での緊急オンライン授業のための情報共有の場としてスタートしたブラウンバックランチャンドラウン (BBL&L) など、さまざまな活動の機会を提供し、授業の事例や知見を共有する機会を設けていることは大変興味深い。さらに ICT を活用した様々な授業形態を紹介する Webinar 開催や授業支援は、学生のみならず、教員に対する支援にも行き届いた目配りがされていることを感じさせる。2016 年からは英語で授業を行う高等教育機関教員向け研修である Oxford English Medium Instruction (EMI) プログラムに希望する教員を毎年数名派遣し、派遣された教員を講師とした教員向け学内セッションも予定されている。こうした取り組みがあることは、学生のみならず教員にとっても自分たちの教育活動を推進する上で大きな活力につながると考える。

さらに ICT では、新入生対象の入学時調査、入学後 3 学期を終了した学生を対象とする、1 年次調査、第 3 学年を対象とした学生学修意識調査、さらに卒業予定者を対象とした卒業時調査を担い、教職員や教授会、理事会で報告している。こうした調査も、教育活動の質保証という点で重要である。

1-5. リベラルアーツ教育と関連づけられたバイリンガル教育と留学

今日、語学教育や留学は、多くの大学において大学の国際化の柱として取り組みが進められている。それは時として留学生の受け入れや派遣の人数で表面的に取り上げられることが多く、短期プログラムの増設やプログラムの学びも国際理解や異文化経験などに特化し、とりあえず交流人数の増加を企図した取り組みも多い。そうしたなかであって、ICU の場合は、もともと国際的なプログラムや交流に力を入れていることはよく知られているが、今回の聞き取り調査により、単に送り出しや受け入れの人数規模という点だけでなく、バイリンガル教育においても留学においても、あくまでもリベラルアーツ教育を補完する形でとらえられていることがよくわかった。このことは、大学の国際化を進めることの意味を改めて問い直すものである。本来の大学の国際化とは、単に英語で授業を行うことや、留学生や派遣する日本人学生の人数を増やすことにあるのではなく、自大学の教育活動との整合性を考え、学生にとって学びのプロセスが一貫して展開されるようなプログラムを提供する

ことこそ、重要なのではないかと考える。自由度が高く選択肢の多い履修計画をサポートする目的から、留学や教職課程などを履修計画に組み込むことは、必然的に長期的な視点でのプランニングが不可欠であるが、ICU においては、学修支援をうまく機能させてこうした学びのデザインを実現できていることは特に高く評価できる。

また留学を支える ICU の制度として、3 学期制や GPA 制度、コースナンバリング制により単位互換の利便性や教育水準の維持が図られていることや、リベラルアーツ英語プログラムと連動して留学プログラムが位置付けられている点も特徴的である。こうした留学に関する考え方があってはじめて、あえて留学を必須としていなくとも、学生の 60% が主体的に海外での学びを選択しているという状況が生まれているといえる。

一方、留学生の受け入れについてもキャンパス内にある寮が 10 棟 900 人定員として用意され、ICU の全学生の 3 割が外国人留学生と日本人学生の共住型の生活を経験できる環境を整えている。留学生に対しても入寮が奨励されている他、クラブ活動への参加も促進されている。実際に学生へのインタビューのなかでも、剣道部や和太鼓部、ワンダーフォーゲル部などには留学生も参加しており、クラブ活動の中でも翻訳係を設けるなど、異文化理解が自然と進んでいる様子がうかがえた。この他、約三分の一が外国籍教員であることや、かつ外国語による科目数が 35・9% であることなど、多様性と共生が配慮された学びと活動を支えている。

こうした留学交流を促進する具体的取り組みとして、国際サービスマーケティングプログラムの展開や ICU 国際サマープログラムの開講、海外大学院との連携など、新たな取り組みや工夫を行っている点も評価できる。

一方で、日本の大学を含め国際的にも留学期間の短期化や早期化の傾向があるなかで、近年では 1 学期間のみの短期留学が増える傾向にあり、こうした動向に今後どのように対応していくかは課題であろう。特に 1 学期留学の増加傾向にあるなかで、ICU の 1 学期が 11 週であることから、アメリカの 1 学期 = 15 週の要件を満たすことが出来ず、1 学期留学が認められないといった状況は、学生のニーズとの関係からも解決が求められる点である。

1-6. 教員相互の連携と教員組織

ICU においては、教員組織がそこまで大きな規模ではなく、学内の活動等で相互に知り合いになる機会も多い。そうした横の連携は、リベラルアーツ教育を進めるうえで重要な組織形態となっているといえる。教員へのインタビューでも、日頃の様子から心配な学生の状況を、その学生のアカデミック・アドバイザーと共有したり、休み時間などの気軽なおしゃべりが相互の交流につながる機会が多いということであった。またティーム・ティーチングで相互に組んでいる教員とは、当然のことながら授業の進め方などについて常に情報を共有したり、話し合ったりしているが、そうした教員同士の交流や意見交換が、学生への刺激にもなり、学際的な教育活動を意義づけている様子がうかがえた。

2. 研究

2-1. 文理融合に向けた取り組み

リベラルアーツ教育には学際性や学融合などの取り組みが求められる。ICU の場合には、すでにこれまでも長年にわたる実績のもとに様々な施策が展開されてきた。特に旧来は理学館に配置されていた理系の研究室が、トロイヤー記念アーツ・サイエンス館のなかに移動となり、同時に、ガラス張りの実験室など、あえて文系の教員や学生との接点を増やして交流の機会が生み出されたことは、文理融合を物理的な空間としても考える機会を与えている。

そこでは文系と理系を融合したリベラルアーツ学部を精神をよく象徴する教室や会議室の配置となっており、建物にすることで自然と文系と理系の学生がそれぞれの分野に接することができるようになっている。

一方で、学生の聞き取りの中で出された意見は、少し異なるものであった。すなわち、理系の学生から見た ICU の文理融合は、いろいろな場面で必ずしもプラスの影響ばかりではないというものであった。たとえば上記の文理融合型の研究室の配置は、理系の学生からすると、従来は少人数ながらも理学館のなかにひとつのコミュニティがあり、そこでひとつにまとまっていたものが、トロイヤー記念アーツ・サイエンス館のなかに移動したことで、逆に文系のなかにはいり、マイノリティとならざるを得なくなったという。

理系の研究室は人数規模も小さく、教員との距離が近く密接な活動が可能である反面、上級学年になり、特定の分野の勉強をしたい場合に、規模の小ささから専門とする先生がおられなかったり、特定分野に限られてしまうという状況があり、結果として大学院に進学する場合に他大学を志望せざるを得ないということもあるという。

2-2. 附置研究所の活動と連携

教員へのインタビューのなかで、トロイヤー記念アーツ・サイエンス館の完成に伴い、これまで学内の異なる場所にあった附置研究所が同館の4階に再配置されたことで、研究所間の連携活動が活性化され、研究所間の交流や課題を共有しやすくなるなど新たな可能性が増えたという意見があった。

2-3. 教員の教育活動と研究活動のバランスについて

教育活動は個々の学生に寄り添う形で大変丁寧に展開されているが、それは教員の力に拠るところが大きい。一方、このことは教員の研究活動の確保という課題にもつながる。今回のインタビューでは文系の教員の場合、現在、週3時間のクラスを2科目（6コマ）、理系の教員の場合は、メインは2クラスであるが、準備を必要としないクラスも1クラス担当しており、週に9コマの担当をしているということであった。加えて、教員にはアカデミック・アドヴァイジングや校務分掌にかかる担当業務などがあり、手厚い教育指導の背後には、

こうした教育にかける時間数の多さがある。この点において、教育活動と、その一方で行われる研究活動のバランスは大事な観点であると考ええる。

教員に対するインタビューからは ICU が 3 学期制をとっており、7～8 月半ばの夏季休暇の期間は、ごく一部の会議を除けば、基本的に研究やプロジェクトに集中できるとの回答もあった。学生の学びと共に、優れた教育プログラムを支えるのは、研究に拠るところが大きいことから、教員の研究活動の在り方は、ICU の教育活動の今後のさらなる発展を支える重要な観点となると考える。

3. 大学運営

3-1. 部署間連携の促進

大学組織とその運営においてしばしば課題とされるのは、部署間の連携をいかにとるかという点である。これは作業の効率性の点に加え、特に ICU のようにリベラルアーツ教育を推進する機関にあっては、いかに理念と目標を共有して運営に当たることが出来るかが活動の鍵となる。この点で、2015 年に学内組織の改編により発足した学修・教育センター（CTL）の活動の展開（前述）は、その効果がよく表れている例といえる。また 2023 年から旧来の国際交流室とサービス・ラーニング・センターを再編・統合し、さらに 2018 年に発足したグローバル言語教育研究センターの事業を一部引き継いで 2023 年に発足したグローバル教育センターとともに、国際連携部を発足させて部内の柔軟な業務連携を図っていることは、業務の効率的かつ機能的な活動を支える組織改編であるといえる。

3-2. 学生・教職員からの意見の取りまとめ

学内連携を円滑に運営し、ガバナンス機能を有効に活用するためには、教職員や学生たちとの間で、日々出される意見やアイデア等を取りまとめ、活用することも重要である。学生たちからは学年末等に行われる意識調査や、授業効果調査を通じて意見を聴く一方、教員からは教授会や大学院委員会を通じて、また職員からは職員会議あるいは部長会を通じて、意見を聴く機会を設けているということであり、大学運営全般において、できるだけ意思疎通を図ろうとしている様子をみてとることができた。

4. キャンパスの教育研究環境整備

自然があふれるキャンパスの美しさは言うまでもないが、理事に直接ご案内をいただき、各建物や施設が持つ歴史的背景に大変感銘を受けた。たとえば、本部棟は中島飛行機が戦前に使っていた建物を保存しながら使用されており、特に入口の礎石に刻まれた伊ザヤ書 2 章 4 節の文言は、大学の理念にも通じるものといえる。また図書館前の「平和記念」の石碑に、キャンパスの植栽管理にあたってきた宮沢氏の名前を刻んで末永く讃えようとしているエピソードなど、大学の理念と歴史を大事にしながら新たなキャンパス環境を整えようとしている点は大変印象深い。

また近年のキャンパス施設の整備も、大学としての教育戦略が良く示されている。特に日本で初めての学生会館として1958年に完成したディッフENDORF記念館は学生及び教員の交流の場として2021年に改装され引き続き大切に使用されている。また本館横に新たに建設されたトロイヤー記念アーツ・サイエンス館や、今後開始される本館の改修など、キャンパスのなかの教育研究環境整備は計画的に展開されている。今後も、理学館の改装や本部棟の改修という流れが予定されており、持続的な環境整備が計画的に展開されている。あわせて財政的基盤が健全に維持されている点も、こうした計画を支えているといえる。

5. 総評

今日の高等教育においては、国際化が進む一方で、社会から求められるイノベーションや社会貢献、人材育成などの課題もあり、あわせて少子高齢化が進む中で持続可能な大学運営が求められている。一方で研究による知の創生を担い、同時に人材育成と教育も求められる大学が、それぞれどのようなあり方を重視し、その目標に向けてかじを切ろうとするかは、個々の大学にとって大きな選択と戦略である。こうしたなかで、今回のICUでの調査全体を通じて強く印象に残ったのは、教学プログラムにおいても、研究活動においても、また教員組織や組織運営においても、総じて建学以来の70年のリベラルアーツ教育の歴史と伝統を守りながら、大学の部署間や、教員相互、教員と学生といった相互の連携を意識的にとり、大学全体でリベラルアーツ教育の推進を維持・発展させようとしている姿勢である。特に、そうした視点が、日々キャンパスで活動を共にする学生や教員、職員の間で共有されており、教育研究活動を活性化させている点は、ICUのリベラルアーツ・カレッジとしての何よりの特徴であり強みであると考えらる。

一方、こうした高等教育機関としてのあり方は、ICUの規模だからこそ可能であるが、今後、教育の充実とともに、研究活動においても活用することができれば、リベラルアーツ・カレッジとしてさらに強みをもつことになろう。その際のカギとなるのは、リベラルアーツ・サイエンスが目指すところである学際的あるいは学融合的な研究である。たとえば、聞き取り調査のなかでも、今後、日本研究に焦点をあてた海外との研究交流活動の活発化を計画しておられるという話をお伺いしたが、まさに国際性豊かなICUの特徴を活かし、かつ日本の大学として海外からも期待が大きい分野であり、今後の進展が期待される。

今日の国際社会でも目標とされる持続可能な開発目標（SDGs）のなかでも、地球規模課題解決のための学問分野の在り方として取り上げられている。今日、日本の大学の多くが、専門性を重視し、それぞれの分野に特化した教学体制や研究活動の展開を中心においているのに対し、ICUは一学部一学科という体制そのものが学際的志向となっている。文系と理系の偏りや規模感など現状の体制をさらによりよいものとし、常に高みに向かって進化し続けているのもICUならではのであろう。学際的教育研究活動の展開を軸に、質の高いリベラルアーツ教育の先導役として、今後一層の発展を期待したい。

以上

2024 年 1 月 26 日

国際基督教大学の外部評価報告書

学校法人東京家政学院理事長
筑波大学名誉教授 吉武博通

はじめに

本報告書は、「国際基督教大学自己点検・評価報告書 2023 年版」及び 2023 年 12 月 11 日に実施した実地調査に基づき評価を行い、所見をまとめたものである。

実地調査では、アドミSSIONズ・センター長・同部長との学生受け入れに関する対話、教養学部長・学務部長との教養学部の運営に関する対話、事務局長・総務部長等による大学運営全般に関するブリーフィングに加え、学生インタビュー、キャンパス視察を行った後に、学長・副学長とのフィードバックを含む意見交換に臨んだ。

冒頭に率直な印象を述べさせていただくと、我が国のリベラルアーツ教育をリードし、圧倒的な存在感を示してきた国際基督教大学（ICU）が、国や認証評価機関が求める内部質保証の基準やシステムに適合させようとするために、結果として画一化が進み、これまで培ってきた良さや強みが損なわれるような状況に陥らないように、守り・発展させていくべき部分と真に改善が必要な部分を明確に意識しながら、ICU に相応しい自己点検・評価システムを確立していただきたいと思う。

キャンパス視察では、英語で教え、英語で学ぶ光景が当たり前のように見られ、新たに開館したトロイヤー記念アーツ・サイエンス館では実験室が目に見え、理系分野でも高度な教育研究が行われていることを改めて実感させられた。何よりもインタビューした 3 人の学生は ICU の学生であることに誇りを持ち、確かな成長実感を得ていることがわかった。限られた時間の切り取られた数枚に過ぎないが、このキャンパスで展開されている教育研究活動、それに基づく学生たちの多様で豊かな学びをこれからも大切にしていきたいと強く思った。

以下、自己点検・評価報告書に記載された 10 の項目の中から理念・目的、内部質保証、教育研究組織、教育課程・学習成果、学生の受け入れ、教員・教育組織（教育研究組織と合わせて）、管理運営・財務の 7 項目について、順に所見を述べていく。

1. 理念・目的

「基督教の精神に基づき、自由にして経験なる学風を樹立し、国際的社会人としての教養をもって、神と人ともに奉仕する有為の人材を養成し、恒久平和の確立に資すること」との理念・目的（使命）に基づき、学問への使命、キリスト教への使命、国際性への使命という 3 つの具体的使命が掲げられている。

その具体的な実践が、(1)語学教育プログラムを通じた学術基礎教育、(2)日本語・英語によるバイリンガル教育、(3)日常のキャンパスでの営みを含むすべてを通じた全人教育であり、これらを通して「人間を自由にする学芸」としてのリベラルアーツ教育が展開されている。

理念・目的が学生、教員、職員という大学の構成員に共有され、広く公表されるとともに、これらが教育研究及び学生生活という実践につながり、その積み重ねが今日の ICU を築き上げていることに深く敬意を表したい。また、理念・目的を将来に引き継ぎ、発展させていくための 5 ヶ年を計画期間とする中期計画も策定され、13 項目の目標も設定されている。

その一方で、専任教員約 150 名のうち直近 5 年で約 3 割が入れ替わるなど世代交代も進んでおり、その中で理念・目的とそれに基づく実践をどう持続・発展させていくかという課題も示されている。この課題にどう向き合うか、今後の取組を見守りたい。

2. 内部質保証

近年の高等教育において「教育の質保証」が重視される中、「内部質保証」は中心的概念として特にその確立が強く求められている。

その一方で、認証評価などにおいて、内部質保証が確立しているか否かについてエビデンスをもって詳細に示すことが求められることもあり、大学は会議や委員会、自己点検・評価を含む PDCA の仕組みなど、多様な装置を整え、それらの要請に応えようとしがちである。

ICU においても、幹部会、教授会評議会、部局、委員会、監事などがこれに関わる組織として登場し、それぞれの役割も明確に規定されているが、全体から受ける印象としては内部質保証の仕組みがやや複雑でわかりにくく、関わる会議体も多く、これらを維持・運用することに過度な時間と労力を要していないか危惧される面もある。

冒頭に述べたとおり、国や認証評価機関が求める質保証に応えようとするあまりに、組織やシステムの整備に過度に力を入れてしまい、それが画一化を生み、教育研究現場の活力を奪う恐れがあることも十分に考慮しておく必要がある。特に ICU のように明確な理念・目的が優れた教育実践につながり、卓越した成果を挙げてきた大学が、近年の教育の質保証に関する諸要請とどのように折り合いをつけるべきかについては、慎重に検討されるべきであろう。

ただ、教育は大学のレベル、教育組織のレベル、教員個々のレベルにおいて不断の改善が図られなければならない、組織間・教員間において教育の質にバラツキがあるとすれば、それを最小化しつつ、全体を上方に引き上げる努力を重ねていかなければならない。ICU が積み重ねてきた優れた実践を維持・発展させながら、これらの課題にどう応えていくべきか、今後の取組に期待しつつ、見守りたい。

なお、付け加えると、内部質保証に関わる組織・職位として監事が位置付けられ、監事が教学監査を重視している点は ICU の特徴であり、この点についてはそれが内部質保証の

充実にどう寄与しているのかなど、改めて機会を得られるならば、監事の見解なども聞いてみたい。

3. 教育研究組織と教員・教員組織（自己点検・評価報告書の3と6に対応）

学士課程は教養学部アーツ・サイエンス学科という1学部1学科体制の下、31のメジャーを置き、その数は変わっていないものの、名称や内部構成は学生のニーズや時代の変化に応じて適宜見直しを行っている。

メジャー運営の母体は8つのデパートメントであり、教員組織として位置づけられており、デパートメント長にはメジャーカリキュラムの運営を担う役割が課されている。

組織図を見た限りの印象に過ぎないが、デパートメントが運営を担うメジャー数は1つから5つまでバラツキが大きく、デパートメントによって守備範囲の広さに差があることが窺える。また、複数のデパートメントが協力して提供している学際的なメジャーをどう運営するかについて、2018年にIDメジャー会議を設置するなどの工夫を行っている。

学長・副学長を中心とする大学執行部、教養学部長、デパートメント長の役割や責任・権限がどう整理され、実際はどのようなになっているのか、いかなる課題があるのかなど、機会があれば具体的に話を聞いてみたい。また、メジャーの名称や編成の変更などを誰が起案し、どのようなプロセスを経て、審議・決定されるのかも確認したい。

また、ダブルメジャーやメジャー・マイナーなどの制度を学生がどの程度利用し、それが学生の成長にどう繋がっているのかなども、今後評価をする機会があれば詳しく知りたい。

リベラルアーツ・カレッジとしてICUは他の大学の追随を許さない確固たる地位を確立しているだけに、ICUがどのような工夫や努力によりその地位を築いてきたのか、また如何なる課題を抱えているかを明らかにすることは、ICUのさらなる発展につながると同時に我が国の大学教育の改善・充実に寄与するものと考えている。

また、教育研究活動の担い手である教員に対する施策としては、教員の多様性（国際性、男女比等）の確保、教員の授業負担を適切な水準とするための配慮、TAの配置・活用、Units Tableによる教員業績の定量化、助教を支援するメンター制度、開学以来続いている全教員が一堂に会するファカルティ・リトリートなど、多様な仕組みが整備されている。

以上述べてきたこと以外で特筆すべき取組として注目したのは、サービス・ラーニングと2019年度から開始した大学院の新たな学修プログラムである。前者については1990年代から取り組んでいるICUが誇るべきプログラムである。後者についてはリベラルアーツ素養をもった実務家養成という目的が実現し、より大きな成果になることを期待したい。

4. 教育課程・学習成果

学士課程におけるリベラルアーツ、対話型の少人数教育、国際通用性という3つは実践

を通して根づいており、ICU を象徴するコンセプトとなっている。また大学院については学際性、対話、多様性を特色としている。学部入学から修士取得までを5年で終える「5年プログラム」は、専門性を深めつつ、より早く社会で活躍できるという学生のニーズを踏まえた制度である。

一般教育科目を1年次や2年次だけにとどまらず、4年間を通して学ぶことができるシステムは素晴らしく、それが多面的に物事を見て、批判的に考えることのできる人材を育てることに繋がっているものと思われる。

そのほか、履修登録の際のアドバイザー教員と学生の個人面談の義務づけ、1学期における標準的な受講単位数の設定による単位の実質化、デパートメント長などによるシラバスの第3者チェック、学修・教育センターによる学修・教育支援など、学生の学びを充実させるための多様な仕組みが整っている点も高く評価したい。

解消に向けた喫緊の課題として示されているメジャー間の不均衡は、学生の希望を重視する結果生じたものであるが、この問題を今後どう解決されるのか見守りたい。

5. 学生の受け入れ

知的好奇心と創造力、論理的で批判的な思考力、グローバルなコミュニケーション能力、強靱な精神力と実行力の4つを柱とするアドミッション・ポリシーを明確にした上で、4月入学と9月入学の制度を設け、多様な選抜方法と多元的な評価尺度による入学者選抜を実施している。

2010年度と2023年度を比較すると、志願者数が2,575人から2,205人に減少、なかでも一般選抜の志願者は1,754人から997人にまで減少しており、アドミッションズ・センター関係者の危機感は強い。18歳人口の減少、一般入試から総合選抜・推薦入試等へのシフトなど、多くの大学で見られる傾向であるが、優れた教育を行っているICUだけに、より多くの受験生・高校生にその特色や魅力が伝わり、志願者数が回復することを願いたい。特に2025年度に新たな入学者選抜制度の導入を予定しており、その成果にも期待したい。

アドミッションズ・センターとの対話の中で、1学科制になったことで理系が見えにくくなったとのコメントがあったが、理系分野において充実した教育研究体制が整っていることが受験生・高校・社会に広く知られていない可能性もある。文理融合は国の政策を含めて大きなトレンドであり、ICUがその期待に応えうる体制を整えていることを広く発信するためのさらなる工夫が必要と思われる。

6. 管理運営・財務

管理運営に関する方針（6つの方針）を明確に示した上で、これに則り、大学運営のための組織の整備、危機管理、予算の編成と執行管理、事務組織の編成、職員の人事・育成、三様監査（監事監査、監査法人による会計監査、監査室による内部監査）などが適切

に実施されており、体制・システム面でも運用面でも十分な水準にあると評価することができる。

ここからは ICUに限らず大学全般にいえることだが、我が国の大学は教職協働を謳いつつも、依然として教員が主、職員が従という意識や体質が残っており、東京大学が実施した全国大学職員調査（国公私立の大学職員が対象）でもそれを裏づける結果が得られている。また、学校基本調査によると日本の大学の専任教員と専任職員の人数比は概ね 2 対 1 であり、欧米の大学に比べると教員数に対する職員数の比が全般に低い傾向にある。そのことが結果として、教員が教育研究活動に専念しづらい状況を生んでいる面もあると考えている。また、国立の大規模総合大学を中心に広がりつつある URA（University Research Administrator）に代表される専門職制度の導入もこれからの大学運営を考える上で一つの検討要素になるものと思われる。

繰り返しになるが、現時点で ICU の管理運営は適切かつ十分な水準にあり、特段指摘することはないが、大学の果たすべき役割や担う業務の範囲が拡大し、それぞれの課題の難易度も高まる中で、個々の職員と職員組織の機能を持続的に高めていくためには何が必要かを常に考え、絶えざる改善を進めていただきたい。

財務面では、卓越したリベラルアーツ教育が高コスト構造の上に成り立っていること、それを学生納付金等の通常収入では到底賄えず、豊富な基金と運用益がそれを支えているという特異な構造にあることが十分に理解できた。また管理会計を導入するなど、独自の工夫も行っている。

そのような中で、指摘や助言を行うことも難しく、収支改善に資する影響額は小さいかもしれないが、人件費・物件費など費用の可視化を通したコスト構造の適正化をきめ細やかかつ継続的に実施していただきたい。収入面でも多くを期待できないかもしれないが、競争的資金、共同研究、受託研究など外部資金の獲得を促し、それを支援する取組の強化を期待したい。いわゆる文系・理系を問わず、また研究の規模の大小を問わず、様々な外部資金獲得の機会を用意されており、自分の研究費は外から取ってくる、といった意識を定着させることも重要と思われる。

おわりに

自己点検・評価報告書と実地調査による評価となったが、外部の立場から指摘や助言を行うというより、どのような形で卓越したリベラルアーツ教育を展開しているのかという関心に基づいて、一つ一つその疑問を解き明かすような気持ちで評価にあたらせていただいた。報告書をまとめて提供いただいた皆さま、実地調査でお世話になった皆さまに心から感謝申し上げたい。

その結果、ICU の教育が開学以来の長い年月をかけて出来上がり、根付いてきたこと、建学以来の理念が見事に実践に貫かれていること、それらを維持し発展させていくための仕掛けが多層的に用意され、絶えず見直し、改善が行われていることがよく理解できた。改めて深く敬意を表したい。

認証評価機関による機関別認証評価やその中で強く要請される内部質保証は極めて重要ではあるが、他方で、その仕組みの維持に高等教育界あるいは個々の大学において膨大な労力と時間が消費されており、しかも画一化をもたらすことも危惧されていることは冒頭に述べた通りである。

ICU が多年の積み重ねの中で築き上げてきた卓越したリベラルアーツ教育をまず何よりも維持し続けることが大切であり、その上で、社会環境、学生のニーズ、学問の動向などを踏まえつつ、その内容と方法を不断に見直し、改善していくことが望ましいと考えている。今後の取組と展開に興味深く見守りたい。

以 上